

長嶺城
(神園山城)

中世専門部会

大田幸博

県立総合運動公園の南側に城跡がある。標高一八〇メートル弱の「神園山」と称される独立した山で、山頂部分の尾根筋に城跡としての遺構が残る。(東側に谷一つ隔てた小山山もこれ又、城跡である)

主郭は、神園山の山頂部分で、国土地理院の三角点がある。尾根筋はこれより東西方向へ延びており、これを刻む堀切が東側に二本、西側に一本残っている。

東西幅二一メートル、南北幅一七メートルの大
きさである。

(1)かつては主郭直下をぐるりと周濠的な溝が巡っていたと思われる。縁には土塁が積まれていたらしく、北側部分に関しては、東西両端に土壇状の高まり（高さ九〇センチ）が残っている。土塁の残欠であろう。一方、高台の東西両側では、現に堀切状の溝となつており、底幅は東側で二・〇～二・五メートル、西側で一メートルの大きさを示す。そうなれば、高台の裾部には周濠状の溝が掘り廻らされていた事になる。

(2)曲輪状削平地と山頂・平場は、北側箇所で二・

から南側へ傾斜する。比して南縁の土壘は、長さ十二メートル、幅一メートルで、高さは數十センチに過ぎない。

山は黄褐色土の、いわゆるガリ土（硬土）であった。遺物の出土もなかった。そこで、平場の地形を変えない様に工事をするならば、遺跡活用の点で工事もやむを得ないとの報告をした事を覚えている。確か昭和五七年頃だったと記憶する。幸いに平場の地形は、今日、以前のままである（）

編集・発行
熊本市
新熊本市史編纂
委員会
熊本市手取本町1の1
市史編纂室
☎328-2038・2903

△長嶺城

△平山神社の祭り

△「新聞下現代」と熊本ラーメンの歴史

△「絵図・地図」編が思わせること

△熊本の花街（五）

△弓削小坂横穴群出土の鳥形瓶

△日誌抄

△史料調査にご協力いただいた方々

△お知らせ

△編集後記

[堀切1]

東方に向へ延びる尾根筋を断ち切るもので、地形が傾斜する東側へ土墨が積まれている。堀切と土墨の長さは、ほぼ同一で約一八メートルを測る。底部は中央で最大幅一メートルを測るが、南端では極端に狭くなり、あたかも薬研堀の様な形状となる。

[堀切2]

堀切1より東側へ三五メートル進んだ所にある。尾根筋の上面部分から南北両側の山腹を堅堀状に掘り窪めたものである。底部は三・〇一三・五メートル幅で、やや大きめの造りとなっている。

[堀切3]

主郭から西側へ一五メートルの所にある。大規模造りで、形状は堀切2と基本的に同じであるが、堀切3の場合、主に南側山腹を刻む所に特色がある。今日、南側山腹に四二メートル分が残っている。(端部は林道工事によつて削り取られている)土墨は尾根筋の下方となる西側部分に残っている。内、北端から南側へかけての一九メートル分については、残りも極めて良好で、幅二メートル、高さ一メートルを測る。

[西側の尾根筋]

堀切3の西側にある長さ四五メートル、上面幅一〇メートルの尾根筋で、平面形状からすれば、一つの郭を構成している様にも思える。但し、尾根筋の上面や山腹は自然地形のままで、人工の手が加わった形跡はなく、郭としての可能性は低いのではないか。

[小結]

結局の所、中世城跡としての遺構は山頂部分を中心にして長さ三五メートル、西側へ長さ

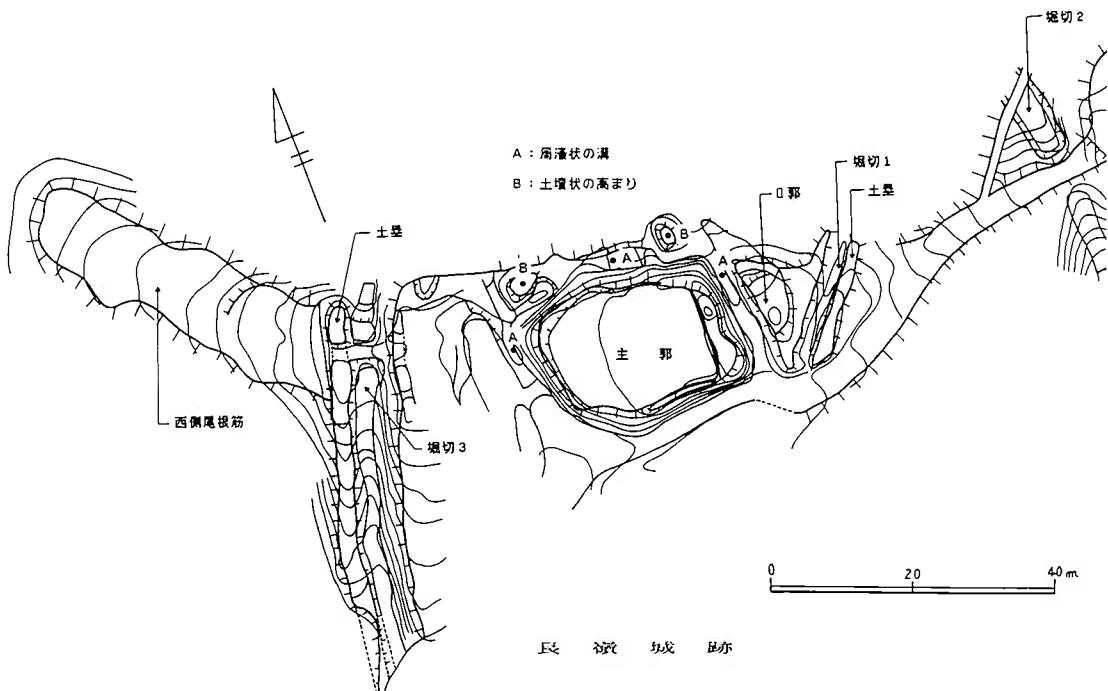
一五メートルの範囲に限定される事が判明した。單なる物見程度の砦跡であろうか。

本文中に記

したように、昭和五七年の試掘の際に遺構が検出されず、出土遺物も皆無であったために、城の年代推定ができない事が惜しまれる。

なお、長嶺城は運動公園に隣接する「地の利」の山にあり、史跡公園としてもっと生かせないものか。

今日、展望台建設に留まつてある点が惜しまれる。



平山神社の祭り

民俗・文化財専門部会

佐藤征子

平山は金峰山の西斜面に位置している。「肥

後国飽田郡村誌」『新熊本市史 別編第一巻』

によれば、戸数は九三戸、人口は四九九人で、人民共立小学校があり、男子五十人、女子十四人がいる。大山祇神を祀る平山神社（祭日十一月十一日）と東陵永璽が開いた雲巖禪寺が村内にある。

現在、平山神社の他にサコさんとヤシロさんと呼ぶ神さんと年の神を祀る。戸数は六十四戸で西・東・南・北・岩戸の五組に分かれている。モトウケ組となる。モトウケ組のホンザと呼ばれる家が一年間供物を供えたり、掃除等をする。モトウケ組の最大の仕事が平山神社の祭り（現在は十月十五日）である。

十五日の朝からモトウケ組のホンザとトビヤク（ホンザを助ける人）の二人が、隣の地区の戸の下田さんに届ける。昔、岩戸の下田さんに兄弟がいて、弟は近津へ出たが、祭りには魚を奉納した。それ以来のしきたりだと言う。ホンザ達は魚の他に近津の海岸から潮水を一升汲んで帰る。モトウケ組は平山神社と他の三箇所の神さんに注連縄をはり、汲んできた潮水やその

他の供物を供える。平山神社の幣殿から拝殿にかけてモトウケ組の名前がはいった提灯を先頭にモトウケとなる順に各組の提灯を飾る。

各組は組毎に午前十時から座祭りを持つ。モ

トウケの組はホンザの家で行う。この座祭りで

前のモトウケとなる組のホンザを釣り御籤（名

前を書き、丸めた紙を柳の御幣で釣り上げる）によつて決める。ホンザに選ばれると「神さん

が来た」と喜ぶ。

平山神社の鳥居の前には消防団によつて、中木や藁をいれて、外側を竹で囲んだ直径が五メートル位、高さが十メートルを越す、火の神

さんと呼ぶオーヤマ（ウーヤマ）が作られる。

以前は岩戸を除く四組の子供達（小学生から中学生まで）が火の神の準備をした。各家から木を五本か竹を二十本集めて、オーヤマを立て、消防団は手伝いをするだけだった。

消防団は五メートル余りの竹の先に丸めた藁



鳥居の前に作られた火の神さん

をつけたボンデンを一本作る。水を付けて置き、火の粉を消したり等火の用心の道具だと言ふ。火の神の点火に用いる、二メートル余りの竹の先にカヤをほうき状にくくりつけた物を四本用意する。

夕方五時から神事を行い、直会と続く。七時

から平山神樂保存会の子供達の神樂が始まり、途中から大人の舞手に代わる。八時半過ぎ、消防団員が神社の近くに待機させていた消防車から一斉にホースで火の神の周り、神社の周りの木々に水をかける。終わると消防団員が幣殿の左右に二人づつ二手に分かれ、カヤのほうき状の物を持って行く。神殿の灯明で火が移される

と駆け足で運び、火の神さんに点火する。この点火は以前は幣殿の右手に南組（南組と東組）、左手に北組（北組と西組）と分かれ、各々男の子三人がカヤのほうき状の物を一本づつ持つた。点火されると早く火の神さんに火を付けた組が勝ちといい、各組の残りの十人十五人の男の子達が火を竹の棒で打ち消そうと躍起になつた。子供が少なくなり、四五年前から止めた。平山に松尾北小学校があるが、生徒数は男子五人、女子五人である。火の神さんが燃える中、神樂は十時半過ぎまで続く。

翌十六日にホンザから次のモトウケ組のホンザへの神おくりで、社殿に飾つた提灯等の道具を入れた長持ちをお祓いして渡す。

火の神さんを焚く行事は、現在は十月十四日だが、元来は十一月十四日だった近津の鹿島神社の祭りを始め、河内町でも多くの神社の祭祀（祭日はかつては十一月）に因んで行われている。霜月の祭りに火を焚くのは太陽の一陽來復を願う気持ちが込められているためと言えよう。



「新聞 下 現代」と

熊本ラーメンの歴史

熊本ラーメン「こむらさき」

松下英明

熊本に来て三千年。
『熊本市史』（昭和七年刊行）を入手して歴史を知り、以来、座右の書になつてゐる。

史の刊行は、熊本市の新しい姿を知る参考書であり、以後の刊行に大きな期待をしている。熊本の食の名物は、一に熊本ラーメン。二に馬刺。三にからし蓮根と言われるよう、熊本ラーメンは熊本の皆様に愛されて、今では全国に知れ渡っている。

そこで、新熊本市史史料編第九巻「新聞 下 現代」を傍らに置いてページを繰りながら、昭和二十九年に熊本初のラーメン店として誕生した「こむらさき」を語ることで、熊本の食文化にまで築き上げられた熊本ラーメンの歴史を明らかにしてみたい。

昭和二十九年（一九五四）九月。広町の先春通り店開店。昭和四十三年に閉店。

昭和三十二年（一九五七）広町店より上林町上通店へ現在の本店に移転する。火力は都市ガスとなる。従業員は六名。ニンニクを油でいため、ニンニクを粉末にしてラーメンに入れる。スープの焚き出しに重油を用い、濃厚なスープを作り出す。熊本ラーメン「こむらさき」を確立する。桂花ラーメンが、オープンする。

昭和三十三年（一九五八）インスタントラーメン日清食品が発売される。ラーメンの知名度が上がる。黒亭ラーメンが、オープニングする。昭和三十四年（一九五九）法人化。有限会社「こむらさき」となる。出前多くなる。豚骨を白濁するまで、バーナーで煮る。又、鶏ガラやキヤベツを加えて、スープを作り出す。スープがミルク色になった段階でガラを取り除く。以上はスープの作り方である。

昭和三十五年より三十九年。出前共に、来客が多く、一日に千杯のラーメンが出る日もある。麵はコシのある時に湯上げする。それに、一文字・海苔・チャーシュを入れる。種類によつて、木耳・メンマを入れる。

昭和四十年（一九六五）熊本市花畠町に銀杏通り店開店。昭和四十三年に閉店。

堂前に間口一間半、五坪の店「こむらさき」を開店する。二十八年の大水害の後である。久留米ラーメンの流れをくむ職人が、玉名を経て、指導。熊本での店舗として初めてのラーメン店。店主・職人の四人で出發。

昭和四十四年（一九六九）熊本市桜町交通センター地下街に出店する。

昭和四十八年（一九七三）センタード改造。大洋火災。

昭和五十四年（一九七九）五月に、中央店オーブン。昭和五十六年に全国的な持ち帰り弁当店（ほつかほつか亭）オープンにより売上げの低下。

昭和六十二年（一九八七）土産ラーメン開発販売する。全国発送も行う。好評で、売上げが増えます。以上現在にいたつていてる。センタード店は

昭和三十二年（一九五七）広町店より上林町上通店へ現在の本店に移転する。火力は都市ガスとなる。従業員は六名。ニンニクを油でいため、ニンニクを粉末にしてラーメンに入れる。スープの焚き出しに重油を用い、濃厚なスープを作り出す。熊本ラーメン「こむらさき」を確立する。桂花ラーメンが、オープンする。

昭和三十三年（一九五八）インスタントラーメン日清食品が発売される。ラーメンの知名度が上がる。黒亭ラーメンが、オープニングする。昭和三十四年（一九五九）法人化。有限会社「こむらさき」となる。出前多くなる。豚骨を白濁するまで、バーナーで煮る。又、鶏ガラやキヤベツを加えて、スープを作り出す。スープがミルク色になった段階でガラを取り除く。以上はスープの作り方である。

昭和三十五年より三十九年。出前共に、来客が多く、一日に千杯のラーメンが出る日もある。麵はコシのある時に湯上げする。それに、一文字・海苔・チャーシュを入れる。種類によつて、木耳・メンマを入れる。

ほんとうに、間口一間半、五坪の店、素朴な木のテーブルで、うまいラーメンを食う。立ち上る湯気の向こうに、熊本ラーメンの発展がある。そこには、狂乱のバブル期に忘れてしまった本当の熊本、いな、日本の姿が見えるよう気がする。

「絵図・地図」編が思わせる」と

くまもと県民テレビ

鍬 守 幹 雄



ある日、数人の仲間と雑談しているうちに、漂泊の俳人、

種田山頭火のことが

話題になった。山頭

火は山口の生まれだ

が、熊本にも住み、

ここで出家得度して行乞の旅に出ていた。その

きつかけとなつた市電停止事件にふれて、誰か

がつぶやいた。

「山頭火は公会堂前（現在の市民会館前）で

市電を止めた」というが、当時の市電はあそこを

走っていたのかなあ。」

「分かるかもしれませんよ」と言つて、私は

『新熊本市史』の「絵図・地図」編を引っぱり

出した。確かにあつた。大正十三年の市街地図

にきれいに出ている。

「ああ、当時は坪井川と長嶺沿いに市電が走つ

てたんだ。」

奇しくも、山頭火が市電を停めたのも大正十

三年だったが、大正時代はすでに遠くなつてしまつたことを感じたと同時に、一冊の資料がそ

の空白を埋めてくれたひとコマだった。

私は「道」にこだわりを持っている。きつか

けは自分自身にもよく分からぬが、もともと歴史には多少の興味があつたし、漠然とした散歩を続いているうちに、それが明確な「道」にこだわり出したのかなと思っている。

東京や名古屋にいる頃には、旧東海道や中山道をよく歩いた。地方建設局や県、市町村の教育委員会に問い合わせると、わりと簡単に道筋が分かる。それを二万五千分の一の地形図に書き込み、周辺の名所、旧蹟などをチェックして行程表をもとに、あちこちの旧道をたどる。楽しい旅である。

縁あって熊本に住みついて七か月余り。といつても、もともと熊本生まれだが、三十数年間の空白を埋めたいと気がせくのか、あちこち歩き回っている。

そんな私にとって『新熊本市史』の発刊は願つても、伴侶の出現に映つた。すぐに全二十一巻を書店に予約したが、全巻揃うまでに数年かかると聞いて、いささかがっかりしたくらいである。

しかし、最初の三巻が届いて、また期待に胸がふくらんできた。うれしくなってきた。

とくに「絵図・地図」編である。これは文句なしにすばらしい。私は専門家ではないのでよく分からぬが、これだけの絵図・地図を一挙に見られるというのは、めったにないのでないかと思う。

そこで提案ですが、『新熊本市史』を市内の図書館（あるいは公民館など）全部と県内の主な図書館に無料で寄贈されはどうかと思う。

（すでに実行されているかもしませんが。）その地域で市民が手軽に利用できれば、市史編さんの意義も、より一層生かされていくよう思うのですが。

この膨大な市史の編さん作業には苦労も多いことと思いますが、すばらしい市史が完結するのを楽しみにしています。とくに、どんな通史が書かれるのか興味しんしんです。

その点で、このトレイス版の採用もささやかな工夫かもしれないが、よくぞやつたと拍手を贈りたい。

私は夜、寝る前に枕元に『絵図・地図』編を拡げて、しばらく眺めるのを楽しみにしている。

ときには熱中し過ぎて、思わぬ夜ふかしをすることもある。

そこで気づいたことは、熊本には新町界わいのように、古い道筋がそのまま残っているところが意外に多いということ。そんなところを見めながら、今度はこの辺りを散歩してみよう、あの辺を調べてみようと、夢をふくらませている。

熊本の花街(五)

民俗・文化財専門部会

鈴木喬

花街を華やかに彩るものは芸妓と娼妓のあでやかさで、唄や音曲がこれに一層の拍車をかける。貸座敷も料亭ももともとは貴顕紳士の宴会・交歓会の場として設営されたものであるから、各々が壯麗な建物に粋な日本庭園を備えており、そこで接待に当たるものは歌舞音曲に堪能な芸妓でなければならなかつた。芸妓はその名の如く芸を売るのが仕事であるから、進退挙措、行儀作法、身だしなみから歌舞音曲まですべてに勝れていなければならぬ。まずこのような芸達者の本物の芸妓を十数名も抱えて宴席に侍らせたのは料亭の一日亭であつた。一日亭は二本樹に移つた後も芸妓の数を増し、一日券番と称されたように芸妓達の資質を磨かせて主に一日亭の宴会に華を添えた。ここには京町時代からの春松・瀧次・小三・米次などというかつての美女が今や中年増となり、姐さん株として客席を取持ち、若手の芸妓も數をそろえ一日亭の名を高めていた。

一方貸座敷の東雲楼も小堀遠州流の回遊式山水大庭園を具えた二階建の大広間を持ちこれを大宴会場としていたので、宴席用に數名の芸妓を抱えていたが、ここも次第にその数を増して十数名に達した。東雲楼の隣には玉川亭に統て新玉があり、向いには清川亭・樂亭などがある。いずれも抱え芸妓を持っていたので、これ

らを合わせて一大勢力となり、通称東雲券番と呼ばれる組織が出来た。

一日券番は明治十五・六年の頃、芸妓の移動等の煩鎖な事務に堪えかねて、一日亭が券番の経営を放棄してしまつた。そこで独立経済で新発足したのが西券番で、別称を二本木券番とも

言い、廊内では古券とも称していた。二本木券番の業務所ははじめ旧二本木駐在所の筋向うに置かれたが、明治二〇年頃一日亭の隣家に移つた。その間の十八年には、県が風俗の頽廃を匡正しようという狙いから、券番の解散を計画したことがあつた。この情報を素早くキャッチし

た二本木券番では鳩首協議の結果、京町時代以来の春松・米次などの姐さん株を選んで解散中止の嘆願委員として県庁に派遣した。当時の担当警部美濃部盛行が話のわかる人で、両人の嘆願を聞いた上で厳しい条件付ではあつたが券番の存続を認める方向で規則を改正してくれた。以来、熊本の券番に籍を置く芸妓は、娼妓との二枚鑑札を持つことを禁ぜられ、芸妓取締り規則による厳しい拘束を受けることになり、例えば芸妓は自前・抱えの区別なく毎日午後四時までに券番に出揃つてお座敷のかかるのを待たねばならなかつた。それも廊内のお座敷は別として、市中からお座敷がかかるわけにはならない。出入りごとに出入鑑札を受けなければならない

数も二〇名位に減少してしまつた。

ところでもう一方の東雲券番の方はどうかといふと、これも東雲楼主中島茂七が関西から優秀な芸妓を次から次へと引抜いて送り込み、西券番と対抗して張合つていたが、日清戦争に際してはその影響をもろに受け、西券と同様に衰退した。

なお芸妓の中には、これら券番に籍を置かないで遊雲稼人の鑑札を受けている「町芸者」と呼ばれる人々がいた。遊廓が当時の城下外の南部にあつたため、町芸者は主に坪井・上通町・迎町・新町に居を構え城下の人々が自宅で行う祝言・祝い事・宴会などに手軽に座興を助け、また式次第の裏方、祝宴への助言・指導なども行ってくれたため、一般に歓迎されていたのである。



東雲樓庭園

まり、国家の予算は軍事費に集約され、財界は国泰沿って緊縮を旨とした。こ

うなると花街は長期に亘つて火の消えたようになり、西券番も券番ごとお茶をひくという日が多くなり、芸妓の数も二〇名位に減少してしまつた。

ところでもう一方の東雲券番の方はどうかといふと、これも東雲楼主中島茂七が関西から優秀な芸妓を次から次へと引抜いて送り込み、西券番と対抗して張合つていたが、日清戦争に際してはその影響をもろに受け、西券と同様に衰退した。

なお芸妓の中には、これら券番に籍を置かないで遊雲稼人の鑑札を受けている「町芸者」と呼ばれる人々がいた。遊廓が当時の城下外の南部にあつたため、町芸者は主に坪井・上通町・迎町・新町に居を構え城下の人々が自宅で行う祝言・祝い事・宴会などに手軽に座興を助け、また式次第の裏方、祝宴への助言・指導なども行ってくれたため、一般に歓迎されていたのである。

四 鳥形瓶の意義

須恵器には、日常雑器として一般的にみられる壺、高环、壺、カメ等の他に特殊な器形がある。二重壺や五連壺などは五世紀代からあるが、特殊器形が増加するのは六世紀以降である。

特殊器形には、鈴付き壺、角环形瓶など、朝鮮半島三国時代に類品の見られるものもあり、相互の交流を示す資料である。

皮袋形瓶、装飾付き壺等は、東海地方から九州まで、かなり広範囲にみられるが、特殊器形には地域色の顕著なものも多い。

一例として、環状瓶は備後地方を中心として分布する。

鳥は、神話にもしばしば登場し、須恵器の題材にも選ばれている。尾張・三河・遠江の東海地方には、七世紀の前半、脚付き壺の蓋の頂部に鳥を付けたものがある。また、備後・安芸では鳥形瓶が造られている。

備後・安芸の鳥形瓶は、全体的に丸味を帯び、胴部と口縁部が一体として造られており、弓削小坂横穴の鳥形瓶とは趣が異なる。このことから、今回出土した鳥形瓶は、備後・安芸で製作されたものではないと考えられる。しかし、羽毛の表現等、共通する部分もみられ、何らかの関連は否定できない。

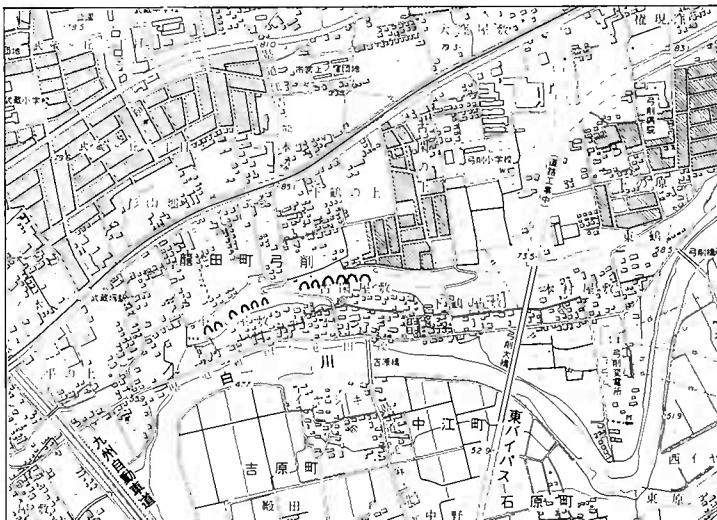
いずれにしても、このような特殊器形の須恵器は、葬礼、祭祀等のために特別に造られたもので、その共通性や相違点は、当時の社会状況を反映したものと考えられる。七・八世紀はある程度文字が普及する時期で、この横穴群からも墨書き土器が出土しているが、まだ考古資料

に頼る面も大きい。そのような意味で、鳥形瓶は、当時の歴史を探るうえで貴重な資料となり得るものである。

〔参考文献〕

熊本市教育委員会『熊本市北部地区文化財調査報告書』一九七一
原口正三『須恵器』日本の原始美術四 講談社 一九七九

田辺昭三『須恵器大成』角川書店 一九八一



定項目検討、新聞史料編反省)
近代史料調査(近世史料編I収載史料下題付
作業)

民俗・文化財史料調査(聞き取り調査報告等
について)

近代史料調査(普賢寺史料)

近世史料調査(近世史料編I収載史料下題付
作業)

現代史料調査(現代史料編収載予定項目の検
討)

近世史料調査(横浜市西田家、法政大学、大
阪城)

第三回近代専門部会(通史編の章立てにつ
いて)

第十九回自然専門部会(上半期経過報告につ
いて)

近世史料調査(飯富家文書)

民俗・文化財史料調査(聞き取り調査報告等
について)

原始・古代史料調査(考古資料編掲載内容に
ついて)

第一回市史編纂委員他都市視察(米沢市立上杉
博物館、会津若松市立会津図書館等)

原始・古代史料調査(出土遺物の調査)

中世出張調査(宮内庁書陵部)

現代出張調査(防衛庁防衛研究所図書館)

第二十九回現代専門部会(現代史料編収載予
定項目の検討)

第二十二回中世専門部会(川尻周辺の巡査調
査報告等)

第三十六回近世専門部会(近世史料編Iの編
集について)

第三十一回近代専門部会(通史編の章立てにつ
いて)

第三十五回部会長会議(上半期経過報告、史
料集の発行について、考古資料編・民俗文化
財編構成内容について)

現代史料調査(現代史料編収載予定項目の検
討)

民俗・文化財史料調査(聞き取り調査報告等
について)

